

16th IDBF 世界ドラゴンボート選手権大会 参加報告書

【全体総括】

JDBA 強化委員 楡木 栄次郎

今回の世界選手権ではメダル獲得と複数種目でのグランドファイナル進出を目標と定め、代表権を獲得したチームを中心に選手選考、強化合宿を行い大会に臨みました。結果、メダルの獲得はできませんでしたが、プレミアスマールオープン及び、シニア B スマールオープンでグランドファイナル進出を果たすことができました。参加された選手、関係者の皆様、大変お疲れ様でした。日本から応援いただいた皆様、誠にありがとうございました。

私は今回の代表選手が目標のために、お金と時間をかけて苦しい練習を積み重ねていたことを見ていたので、すべての選手に目標達成という結果で報われてほしかった、というのが本音ですが、結果以上の成果も十分にあって感じています。参加した選手自身が、世界の最新の情報を手に入れ、今の世界トップの実力を肌で感じることができました。これは実際に国際大会に参加しないと味わえない緊張感でありレベルの高さです。世界の壁の高さを目の当たりにすることで、今後世界と戦うためにはどうするか具体的に考え、それを自分のチームに持ち帰り、試行錯誤をしながら競技レベルを上げていくモチベーションになりました。このような熱量は日本国内のドラゴンボートの普及と発展に必ずつながっていくものと期待しています。

日本代表の活動は各チームの競技力強化の活動に依存しています。現時点では代表を獲得したチームが中心となって他チームの選手を含めて選抜、強化をしていく方式がベストを考えています。おそらく2年度の世界選手権も同様の代表チーム編成になります。強化委員会としては、国際大会を意識した200M、500M種目の選考会実施や国際大会への選手派遣を積極的に行う予定です。かつて同レベルで競っていたイランやマカオといった国々もプレミアカテゴリーを中心に選手強化を行い、今回結果を残しています。日本代表も必ずそのレベルに到達できる素質があります。今回の経験をベースに、もう一度視野を海外に向けて、彼らと戦えるフィジカルを鍛え上げ、パドリングのスキルをさらに磨き、世界の壁に挑戦していきましょう。

【プレミアオープンスモール報告書】

プレミアオープンスモール キャプテン b p 木村航

タイ・パタヤで開催されました世界選手権のプレミアオープンスモールカテゴリーに参加させていただきました。参加にあたり JDBA、他チームの皆様より多大なるご尽力を賜り、大変感謝申し上げます。参加メンバーは下記の通りです。

<クルーメンバー>

- ・太鼓：渡邊真希子（東京龍舟）
- ・舵：米山健一（東京龍舟）
- ・パドラー（b p）

稲岡邦章、木村航、窪田一磨、久保雄太郎、高橋周平、土井幹太、林達也、林裕之、林田陸、藤野拓巳、堀田真広、宮澤吟平、康富一輝、渡邊快都

今回我々は 200m と 500m に出場し、グランドファイナル進出を目標にレースに挑みました。太鼓と舵メンバーを東京龍舟の方から派遣いただき、慣れない環境の中でも最高のパフォーマンスを発揮していただきました。ご協力いただき誠にありがとうございます。それぞれの試合結果を下記にまとめさせていただきます。

<レース結果>

●8/12（土）200m

・heat2（予選）	・rep1（敗者復活）	・Grand final（決勝）
1 着：46.465 Indonesia	1 着：49.180 Iran	1 着：45.501 Indonesia
2 着：49.295 Japan	2 着：49.804 Japan	2 着：46.788 Thailand
3 着：50.492 Hong Kong China	3 着：50.760 Germany	3 着：47.418 Macau China
4 着：51.242 Germany	4 着：51.811 Malaysia	4 着：47.491 Chinese Taipei
5 着：52.640 Malaysia		5 着：49.093 Malaysia
		6 着：50.245 Japan

（予選）

メニュー:スタート 30+巡航 3set+スパート

レートは想定では巡航 90 でしたが、舟の進みが良かったのでレート 100 前後まであげています。スタートは想定通り max120 です。結果 2 位でゴールしましたが、予選 2 組目の 2 位マカオが 47 秒だったため予選通過ならず、敗復に進みました。

（敗者復活）

メニュー:スタート 30+巡航 3set+スパート

イランに勝てば確定、2 位でもタイムベストで上がるという場面でしたので、ここで全てを出し切る気持ちで挑みました。巡航レートは少しだけ落とし(95)、より大きく漕ぐことを意識しました。そのおかげでスパートから舟はさらに伸びましたが、惜しくも負けてしまいました。しかし、ドイツに勝ちタイムでもベストを獲ったため、念願のグランドファ

イナルに進むことができました。

(決勝)

メニュー:スタート 30+巡航 3set+スパート

スタート 10 本目程度でクルー 1 名のパドルが折れたこともあり結果は 6 位と残念でしたが、9 人で 50.2 秒という現時点最高のパフォーマンスで出し切ったと感じています。ただ、メダルを獲るにはあとベストタイムから 2 秒は縮めなければいけないため、改めて世界の壁も感じました。

●8/13 (日) 500m

・ heat1 (予選)

・ rep1 (敗者復活)

1 着 : 2:07.413 Chinese Taipei

1 着 : 2:10.306 Iran

2 着 : 2:09.796 Germany

2 着 : 2:11.225 Philippines

3 着 : 2:11.990 Hong Kong China

3 着 : 2:13.844 Japan

4 着 : 2:14.353 Japan

(予選)

メニュー:スタート 20+巡航 10set+スパート

スタートの駆け上がりは 200m 同様で、巡航 10set をレート 85、スパートを 90 で想定しました。しかし、スパートが想定よりかなり多く、34set(合計巡航 44set)となってしまうので、後半失速しました。経験不足からの作戦ミスと、チーム全体の体力不足を課題として感じました。2 位のタイムベスト狙いでしたが、残念ながら最下位として敗者復活に進みました。

(敗者復活)

メニュー:スタート 20+巡航 20set+スパート

レートはスタートを変えず、巡航 20set を 80、スパートを 85~90 で想定しました。

レート 80 にしたことで、大きく漕ぐことができ、20set の段階でも余力を残してスパートをかけられました。ゴール手前 8set くらいからさらに上げてレート 90 程度だったと思います。しかしスタートから中盤にかけて他チームと常に半艇身以上差を開く結果となり、予選通過もできませんでした。

<総括>

グランドファイナル進出を目標として 200m と 500m に出場しましたが、結果、200m において念願のグランドファイナルに進出することができました。グランドファイナルでは 1 名のパドルがスタート直後に折れてしまい、結果 6 位となってしまいましたが、最高の舞台上で世界の強豪と一緒に漕ぐ素晴らしい経験を積むことができました。500m においても 4 年前に開催された世界選手権から約 6 秒縮めることができ、グランドファイナル進出はかないませんでした。成長を実感することができました。

他国と漕ぎを比較すると強豪国はピッチが速い中でもしっかりとレンジをとりながら力強く漕いでおり、最大筋力・筋持久力に大きな課題を感じました。とはいえ、勝負できる可能性を感じる事ができたため、次回の大会ではメダル獲得を目指して、さらなる精進を積んでいきたいと思ひます。

【プレミア女子スモール報告書】

プレミア女子スモールキャプテン 西村まりな

2023年8月7日～13日に行われましたIDBF世界ドラゴンボート選手権大会にプレミア女子スモール艇として以下12名で参加させていただきました。

井口美穂	【すいすい丸】	西村まりな	【漕遊人】
金城優菜	【沖縄龍舟】	沼澤ダフニィー	【漕遊人】
小島萌唯	【すいすい丸】	野世敦子	【すいすい丸】
柴田恭江	【すいすい丸】	南出夏奈	【すいすい丸】
鈴木杏	【すいすい丸】	宮本芙美香	【関西龍舟】
津川紗貴子	【Super Dolphin】	柳亜沙美	【Super Dolphin】

〈チーム目標〉

グランドファイナル進出

〈チームビルディング〉

5チームから構成されたJAPANチームは3月から7月にかけて、兵庫県相生市、滋賀県大津市、沖縄県豊見城市、3か所で5回の合宿を行いました。全国各地からの選抜メンバーでのチーム構成のため、漕ぎの統一やレース展開などの確認を行い、チームアップを行った。

〈レース結果〉

2000m 1位 Indonesia…10:02.049 2位 China… 10:06.451 3位 Iran… 10:22.656 ↓ JAPAN…11:11.898	500m 1位 China… 2:15.090 2位 Thailand…2:17.328 3位 Macau… 2:21.482 ↓ JAPAN…2:30.524	200m 1位 Indonesia… 52.560 2位 China… 53.123 3位 Thailand…55.396 ↓ JAPAN…58.348
--	---	---

2000mに関しては世界の選手に対し、持久力がかけています。

200m、500mのカテゴリーに関しては、スタートダッシュは他国に並ぶ勢いを見せますが、中間から終盤に向け、他国に追いつかれ、追い抜かれていきます。200mの部で、優勝したインドネシアチームは、スタートからゴールまで一切ピッチを落とすことなくゴールへと駆け抜けられるフィジカルをもっていました。目指すべくは、そこなのだと思います。

〈最後に〉

世界で戦うことの難しさを改めて痛感し、身体的にも精神的な部分でも現実を受け止め今後の活動の在り方を、チーム、個人間でも考える時間となりました。

今大会の参戦にあたり、ご協力、応援いただきました皆様にお礼申し上げます。

【プレミア混合スタンダード報告書】

プレミア混合スタンダードキャプテン 東京龍舟 渡邊真希子
22年日本選手権で代表権を獲得した東京龍舟を中心に、他5チームからの選抜メンバーと共にプレミア混合スタンダード Team JAPAN を編成いたしました。

●参加メンバー

・キャプテン：渡邊真希子（東京龍舟） ・副キャプテン：河内啓介（東京龍舟）
・選手：阿久根萌香（INO-G）、飯土用達也（東京龍舟）、稲岡邦章（bp）、井上義章（東京龍舟）、岩井康子（東京龍舟）、江口由利子（東京龍舟）、江田育慧（東京龍舟）、大西健太（すいすい丸）、大本怜依（東京龍舟）、緒方大輔（東京龍舟）、岡本幸太（東京龍舟）、岡安夏美（東京龍舟）、奥津ノンナパット（INO-G）、小田島あずさ（東京龍舟）、片岡裕太（東京龍舟）、北川由季（東京龍舟）、清田和宏（すいすい丸）、久保雄太郎（bp）、小島葉子（東京龍舟）、近藤啓樹（東京龍舟）、高橋周平（bp）、竹谷銀一郎（東京龍舟）、玉津早駿（東京龍舟）、土井幹太（bp）、唐欣（チャイナドールチマキ）、新田茂雄（東京龍舟）、新田淳平（関西龍舟）、二瓶禎久（東京龍舟）、楡木栄次郎（東京龍舟）、野尻恵子（東京龍舟）、花本遥香（関西龍舟）、藤野巧巳（bp）、古澤比奈子（東京龍舟）、堀田真広（bp）、緑川浩章（東京龍舟）、宮澤吟平（bp）、宮原千波（東京龍舟）、吉田太郎（東京龍舟）、吉見寿子（東京龍舟）、吉村典子（東京龍舟）、米山健一（東京龍舟）、李美雲（東京龍舟）、林志堅（東京龍舟）、渡邊快都（bp） 延46名

●レース結果

- (1) 1000m 4着：4'14"446 (rep2) ※以下 GF タイム参考
1着：3'48"193 Indonesia、2着：3'49"961 United States、3着：3'50"425 Canada
--- 6着：4'07"399 Ukraine ※GF 出場ボーダーライン
- (2) 2000m dsq ※ターン時に隣の艇と接触し失格（判定前タイム 9'49"205）
1着：8'26"043 United States、2着：8'27"691 Canada、3着：8'31"058 China
- (3) 500m 4着：2'04"939 (rep1) ※以下 GF タイム参考
1着：1'51"402 Indonesia、2着：1'52"187 Canada、3着：1'53"028 China
--- 6着：2'00"112 Thailand ※GF 出場ボーダーライン
- (4) 200m 4着：49"384 (rep2) ※以下 GF タイム参考
1着：43"979 China、2着：44"181 Canada、3着：45"304 Thailand
--- 6着：47"154 Philippines ※GF 出場ボーダーライン

●所感

クルーの目標として Grand Final 進出を掲げていましたが、結果一つも進出することができず、国際経験の差や日本のドラゴンボート競技層の薄さ、成長の伸び悩みを感じる結果となりました。

世界的には混合カテゴリーにおいて、プレミアスタンダードが花形ですが、過去の世界大会データと現在の日本の実力を鑑み、スモールカテゴリーを優先にメンバー構成しました。そのため、スタンダード Team JAPAN クルーは 1000m 以外、事前に全体で集まって練習をすることはなく、現地ではじめてクルー作るという構成となりました。毎レースにて予選一本目のアジャストが難しく、二本目の敗者復活戦で精度を高め、タイムを縮める展開になりました。レース戦略・レースプランはどうだったのか、キャプテンとしてもっとクルーの力を引き出す方法はなかったのか、また 1 パドラーとしてもっと高いパフォーマンスを発揮できなかったのか、など反省点はいろいろと挙げられます。

19 年の第 14 回 IDBF 世界ドラゴンボート選手権大会のタイムと比較は以下の通り；

- (1) 1000m 19 年： 4'22"918 →23 年：4'14"446
- (2) 2000m 19 年： 9'26"362 →23 年：dsq
- (3) 500m 19 年： 2'00"829 (plate final) →23 年：2'04"939
- (4) 200m 19 年： 49"098 (plate final) →23 年： 49"384

レース会場が異なるため一概に比較はできませんが、1000m のみベストタイムを出すことができました。やはり日本にて選抜されたスタンダードメンバーでの練習が必須であること、またこれ以上世界との差ができないよう、ADBF も含め、日本国内に留まらず、国際経験を積むことが非常に大切だと思います。

19 年にそれほど競技力の差のなかったマカオチームの成長は著しく、当チームのメンバーが情報収集したところ、中国本土からチームコーチを迎えたようです。プレミアスタンダード混合 2000m 4 着：8'42"428、と強豪国に食いつく結果を残しています。ローピッチでもフィニッシュまで押し込む漕ぎが印象的でした。他国の良い部分をどう Team JAPAN に導入できるか。我々には伸び代があると捉え、今回の貴重な経験を今後に活かしていきたいと考えています。

最後に、本大会にてチーフオフィシャルを務められた JDBA 国際委員の菖蒲様はじめ、多くの皆様より多大なるご尽力を賜り感謝申し上げます。また世界大会参加にあたり事務的なサポートして下さった幹事・関係各位の皆様、クルーを応援して下さい家族や日本で応援して下さいいたドラゴンボート関係者の皆様、たくさんの皆様の支えがあって今回も世界へチャレンジが実現しました。

クルー一同、皆様に感謝すると共に、今回得た経験を今後の Team JAPAN の発展に繋げてまいります。皆様、本当に有り難うございました。

【プレミア混合スモール報告書】

プレミア混合スモールキャプテン 東京龍舟 近藤啓樹

1. 目標設定と総括

過去の世界選手権の Grand Final 決勝タイムと国内選手権のタイムを比較・分析し、ベストメンバーを集結させた際に最も競争力があるのが「スモールプレミアミックス」の「500m」であり、メダル獲得も視野に入るものと判断し、2022 年末の選考会からチーム組成を行ってきた。

結果としては Grand Final 進出さえかなわなかった。200m については練習のベストタイムを大幅に更新することが出来たが、依然上位国との差は小さくない。強豪国と伍していくためには、100m 毎におよそ 1 秒を縮めていかねばならない。

日本の（混合カテゴリ）トップ層を結集してもこの結果であることを鑑みると、今後国内に於いても、業界全体として更に裾野を広げる、競争環境を整備する必要性を強く感じた。

予算があれば他国のようにアウトリガーカヌーやカヌースプリントの競技者をスカウトして出場させることも可能だが、現状これは現実的でないため、継続して実現可能性のあるメダル獲得のための具体策を吟味していきたいし、他チームからもアイデアがあれば募りたい。

2. 各レースリザルト要旨

メンバーリスト（含リザーブ）

新田淳平（副キャプテン、関西龍舟）、花本遥香（関西龍舟）、阿久根萌香（INO-G）、奥津ノンナバット（INO-G）、吉見寿子、米山健一、宮原千波、近藤啓樹（キャプテン）、小島葉子、岡本幸太、林志堅、片岡裕太、小田島あずさ、李美雲、岩井康子、吉田太郎（以上東京龍舟）

(1) 2000m：10 分 14 秒 141、11 か国中 8 位（1 位カナダ 9 分 52 秒 219、3 位ドイツ 10 分 2 秒 073）

先に出艇したニュージーランドを追い抜くのに体力を消耗しすぎてラスト 1000m のタイムが伸びなかったと思われる。刺し方、刺され方にもテクニックが必要なことが改めてわかった。

(2) 500m：予選 2 組 3 位、2 分 19 秒 194。敗者復活戦 1 組 3 位 2 分 17 秒 281（同組 1 位フィリピン 2 分 15 秒 414、2 位台湾 2 分 16 秒 372）。Grand Final 1 位カナダ 2 分 10 秒 734、3 位タイ 2 分 12 秒 469。

敗者復活選全体では 3 位のタイムだったものの、組の上がり方の運が悪く、決勝には上られず。他国と比べると 1 パドルでの伸びがまだ足りない。リカバリーももっと縮められる。

(3) 200m：予選 2 組 4 位、54 秒 271。敗者復活戦 1 組 2 位 54 秒 476（同組 1 位台湾 53 秒 422）。Grand Final 1 位中国 49 秒 983、3 位カナダ 50 秒 932。

1 本目はスタート時に左に傾いたが、2 本目では修正、台湾との差は縮めたが決勝には届か

なかった。200mとしてはベストタイムを出した。ハイレート以前の基礎力の見直しが必要。

最後に、JDBA 関係者特に菖蒲副理事長、大会幹事一同、費用や時間の捻出をしながら長い期間のプロジェクトについてきてくれたチームメンバーおよびその関係者、また応援してくれたすべての関係者へ感謝申し上げたい。不測の事態にも周囲の協力で何とか対応できた。

国際大会で好成績を取ることがドラゴンボート界の発展に資すると信じ、挑戦を続けたい。

以上

【シニアA・オープン（スタンダード／スモール） 報告書】

シニアAオープンキャプテン 東京龍舟 尾寅慎介

2023年8月8～13日の6日間、タイ・パタヤにて開催された第16回IDBF世界ドラゴンボート選手権大会にシニアA・オープンカテゴリー（スタンダード／スモール）に参加させて頂きました。参加にあたりJDBAはじめ他チームの多くの皆様より多大なるサポートを頂き御礼申し上げます。

本カテゴリーは、昨年の代表選考会において東京龍舟が代表権を得たシニアカテゴリー（スモール及びスタンダード）において、東京龍舟を主体としたクルー編成を行い出場した、シニアA・オープン・スタンダードの1000mレース、及びシニアA・オープン・スモールカテゴリーの200m、500m及び2000mレースについて概要ご報告致します。

【参加者】 （順不同、敬称略）

① シニアA・オープン・スタンダード（1000mレース）

太鼓：野尻恵子（東京龍舟）、 舵：清田和宏（すいすい丸）

パドラー(計24名)：

尾寅 慎介（東京龍舟）、井上 義章（東京龍舟）、楡木 栄次郎（東京龍舟）、中村 公一（東京龍舟）、内田 圭（東京龍舟）、南野 健一（東京龍舟）、下郡 洋介（東京龍舟）、長谷川 尚輝（東京龍舟）、竹谷 銀一郎（東京龍舟）、藤本 孟志（東京龍舟）、二瓶 禎久（東京龍舟）、緑川 浩章（東京龍舟）、岩城 耕一（すいすい丸）、今川 昇（すいすい丸）、湯本 幸一（すいすい丸）、藤ノ井 竜也（すいすい丸）、南 健太（すいすい丸）、若狭 和也（沖縄龍舟）、儀間 朝哉（沖縄龍舟）、福井 英之（沖縄龍舟）、笠川 淳史（関西龍舟）、堀口 豊（関西龍舟）、山本 剛（Bon Oyage）、三村 徹（INO-G）

② シニアA・オープン・スモール（200m/500m/2000mレース）

太鼓：野尻恵子（東京龍舟）、 舵：清田和宏（すいすい丸）

パドラー(計12名)：

尾寅 慎介（東京龍舟）、南野 健一（東京龍舟）、下郡 洋介（東京龍舟）、長谷川 尚輝（東京龍舟）、竹谷 銀一郎（東京龍舟）、藤本 孟志（東京龍舟）、緑川 浩章（東京龍舟）、笠川 淳史（関西龍舟）、堀口 豊（関西龍舟）、若狭 和也（沖縄龍舟）、山本 剛（Bon Oyage）、三村 徹（INO-G）

【クルー選考・編成】

シニアカテゴリーのクルー編成に辺り、東京龍舟が獲得したプレミアミックス（スモール及びスタンダード）の代表権のクルー編成と合わせ、昨年12月に選考会（250m一人漕ぎタイム測定、漕ぎの合わせ、東京龍舟の漕ぎへの順応性、等を総合的に評価）及びその後計5回の合宿を実施※。選考会には、東京龍舟メンバーに加え、国内有力チームへ選考会への参加を呼びかけ、総勢約70名（うちシニア35名）が参加。

選考を踏まえ、シニアカテゴリーは、シニアA・オープン・スモール及びシニアB・オープン・スモールのカテゴリーに出場し（200m/500m/2000m）、またシニアA・オープン・スタンダード1000mレースのみ、シニアA及びシニアB・オープン・スモールのメンバー合同で出場することとしました。（スタンダードの他の距離のレース（200m/500m/2000m）は、スモールのレースと同日開催となりダブルエントリー不可のため出場せず。）

※選考会／2022年12月17-18日、合宿／2023年1月14-15日、2月11-12日、3月11-12日、4月8-9日、7月22-23日

※東京龍舟40名（うちシニア24名）、他チーム（6チーム）31名（内シニア21名）

【レース結果】

① 1000mシニアA・オープン・スタンダード

出場国5か国で、1000m x 2レースの合計タイムで競うタイムレースで、日本は2レースとも5か国中4位の結果となった。（1レース目 4分11秒、2レース目 4分8秒）記録が確認できる前回2019年大会では、艇及びコース環境の違いはあるものの前回大会記録（4分26秒（予選）及び4分24秒（B決勝））と比較すると、タイムの大幅な改善。また、今大会では、日本の上位チームとのタイム差は、優勝チーム（中国3分52秒、16秒）、3位（アメリカ3分57秒、11秒差）となっており、こちらも前回大会（優勝チーム（カナダ、3分56秒、30秒差）、3位ドイツ（4分3秒、20秒）、と約半減しており、世界の競合チームとの差が縮まっていることが確認できた。

Day1/ 8th, August, SeniorA/Open/Standard/1000m

round1

1	China	3:54
2	Canada	3:58
3	United States	3:59
4	Japan	4:11
5	Great Britain	4:12

round2

1	China	3:52
2	Canada	3:57
3	United States	3:57
4	Japan	4:08
5	Great Britain	4:12

※round1&2の合計タイムで勝敗。（round1&2とも順位変化なし。）

② 2000mシニアA・オープン・スモール

2000mレースにおける、レースプランは以下の通り。

- ✓ スタート位置 : スタートラインから1艇身程後ろに艇をつける。艇毎のスタート間隔は12秒で、スタートラインを超えて計測開始なので出来るだけ加速してスタートラインを通過する狙い。(スタートラインで艇を止める必要なし。)
- ✓ スタート方法 : スタート20本+321ゴー切り替え、10本目でピッチ100まで上げて、11本目から20本目+321までは、ピッチ100キープ。
- ✓ ミドル : ゴーから巡航ピッチ75へ切り替え。
- ✓ ターン : 回航中も、パドラーは巡航ピッチで漕ぎ続ける。ターン入口及び出口で舵が合図を出す。ターン終了時に舵の合図を受け、太鼓は『行くよ！321ゴー』の声掛けで、20本ピッチ上げ+321ゴー、最初の3本でピッチ90まで上げて321までピッチ90を維持して舟を再加速させる。ゴーから巡航ピッチ75。
- ✓ ラスト : 残り250mで出力上げ。残り200mでmaxピッチ85に上げる。
- ✓ その他/ルール : 回航前の赤旗地点で複数の艇が競っている場合は、審判艇から先行する艇に対して優先権("priority")が与えられ、回航時は道("corridor")を譲る必要あり。万が一、艇が接触した場合は、ぶつめた艇の方が艇を止め、一定の距離(2メートル)を開いたことを確認した上で、漕ぎ始めないと失格となる。

レースは概ねレースプラン通りに進めることができたが、最初の回航前に後発の中国に追いつかれ、またその際にインコースを取られたため、日本はアウトコースから安全策を取った回航ルートとなった。またミドルの漕ぎ力で自力の差が出て10各国中9位の結果となった。

Day3/ 10th, August, SeniorA/Open/Small/2000m

final

1	Thailand	9:56
2	China	9:58
3	Australia	10:05
4	Iran	10:06
5	Hong Kong	10:14
6	United States	10:15
7	Germany	10:22
8	Philippines	10:29
9	Japan	10:39
10	Sweden	11:15

③ 200mシニアA・オープン・スモール

200mレースにおける、レースプランは以下の通り。

- ✓ スタート方法 : スタート25本+321ゴーで切り替え。5本目から10本目までの間にピッチ110まで上げる。
- ✓ ミドル : ミドル切り替え後、巡航ピッチ「85～90弱」。ミドル本数は、20本決め打ち。
- ✓ ラスト : ラストピッチは、巡航ピッチ「85～90弱」のまま変えず、出力を高めストロークレンジを自身最大ストローク意識。ラストの本数は、35～40本想定。

200mレースは、予選及び敗者復活の2レースに参加。結果としては、敗者復活で2位に入ったものの敗者復活の他組の2位のドイツのタイムに0.7秒及ばずGrand Final進出ならず。2レースともレースプラン通りペースメーカーができ、スタートは他国対比競争力あり、スタートからミドル切り替え後までは他国と横並び乃至は少し前にでることができたが、ミドル及び中盤以降の伸びが足りず終盤で劣勢となった。

Day5/ 12th, August, SeniorA/Open/Small/200m

予選/heat1

1	China	0:48.64
2	Thailand	0:49.66
3	Australia	0:51.63
4	Japan	0:53.49
5	Singapore	0:55.00
6	Sweden	0:55.87

敗復/repechage2

1	United States	0:52.81
2	Japan	0:53.81
3	Singapore	0:54.76
scr	Iran	

⇒敗復で2位となったものの他組（1位 Australia 52.83、2位 Germany 53.15）の2位よりタイムが劣り敗退。

④ 500mシニアA・オープン・スモール

500mレースにおける、レースプランは以下の通り。

- ✓ スタート方法 : スタート20本+321ゴーでミドル切り替え。5本目から10本目までの間にピッチ110まで上げる。以降切り替えまでピッチ110維持。
- ✓ ミドル : 切り替え後ミドルピッチ「80～85」維持。
- ✓ ラスト : ラスト50m～100m地点付近でラスト入れる。（レース展開により太鼓判断）ラストのピッチは、出力マックス&フィニッシュを強くし、結果として、ピッチ90+ α 想定。

500mレースは、200mレース同様にいいスタートがきれたが、ミドル切り替え後にミドルの自力の差が出て、徐々に上位チームと引き離される展開となった。

Day6/ 13rd, August, SeniorA/Open/Small/500m

予選/heat1

1	China	2:12.37
2	Thailand	2:12.52
3	Australia	2:16.44
4	Germany	2:21.29
5	Japan	2:21.32
scr	Singapore	

敗復/repechage2

1	Philippines	2:17.04
2	Iran	2:18.58
3	Japan	02:20.2
4	Sweden	2:32.18

⇒敗復で、各組1位乃至2組中の最も早い2位に入らなかったため敗退。

【所感】

今大会の結果を通じて、Grand Final進出こそならなかったものの、前回大会比、シニアAの世界大会での競争力がついていることが確認できた。。要因としては、今大会ではクルー編成に辿り東京龍舟をベースとし、幅広く国内有力チームに対して参加を呼びかけ、東京龍舟及び他チームとも全員一律の選考会への参加を通じたメンバー選考を行ったことで、選手層の底上げが図れたこと、また、5回に渡る合同合宿（終日練習 x 2日間）を通じて、異なるチームから参加するメンバー間の漕ぎの統一及びチームビルディングが図れたことが考えられる。他チームから参加するメンバーにとって金銭的・時間的負担が発生するため回数の限度はあるが、今後も有力な手法の一つと考えられる。

なお、レース結果としては、200m/500m/1000m/2000mの中では、200mが最もGrand Finalに近づけた結果となり、日本のスタート（強いキャッチ及び合わせ）が相応に競争力があつたが、一方で、ミドルの漕ぎは他国との自力の差がありレース中盤以降劣勢となる画面が散見され、各国で主流とみられるロングストローク漕ぎの習得が今後の課題と考えられる。

【シニアB・オープン（スタンダード／スモール） 報告書】

シニアBオープンキャプテン 東京龍舟 井上義章

【参加メンバー】

太鼓手：北川由季(東京龍舟)

漕手：内田圭(東京龍舟)、儀間朝哉(沖縄龍舟)、藤ノ井竜也(すいすい丸)、湯本幸一(すいすい丸)、今川昇(すいすい丸)、二瓶禎久(東京龍舟)、井上義章(東京龍舟)、岩城 耕一(すいすい丸)、楡木栄次郎(東京龍舟)、南健太(すいすい丸)、中村公一(東京龍舟)、福井英之(沖縄龍舟)

舵手：宮崎泉(INO-G)

【レース結果】

2000m、8月10日木曜日

- 1位 9:46.180 タイ
- 2位 9:49.856 中国
- 3位 10:19.722 フィリピン
- 4位 10:24.526 日本
- 5位 10:27.686 ニューージーランド
- 6位 10:41.728 台湾
- 7位 11:01.521 イギリス

200m、8月12日土曜日

- 1位 51.248 中国
- 2位 51.646 タイ
- 3位 52.544 香港
- 4位 53.967 フィリピン
- 5位 54.471 日本
- 6位 55.436 ニューージーランド

500m、8月13日日曜日

- 1位 2:09.629 中国
- 2位 2:10.694 タイ
- 3位 2:17.489 ニューージーランド
- 4位 2:17.537 日本
- 5位 2:19.528 台湾
- 6位 2:35.713 シンガポール

【所感】

2023年8月8日火曜日から8月13日日曜日にかけてタイ王国/パタヤで開催された第16回IDBF世界ドラゴンボート選手権大会におけるシニアBオープンスモール艇について報告させていただきます。

今大会の戦績を踏まえて確認出来たことは、シニアBにおいてはもはやグランドファイナル進出が目標なのではなく、メダル獲得こそが目標であるということです。

全国から精鋭を集め、オープンなのかミックスなのか出場カテゴリーを選択し、どの距離で勝負するのか論理的に計画を立て、レースプランに沿った練習を積んでゆけば、確実にメダルに手が届くであろうことが分かりました。これまでに無い、この大きな収穫と進歩を喜び、誇りとしたいと思います。

世界大会は各国のナショナルチームが戦うトーナメントであります。ナショナルチームの編成は必須であり、日本国内における代表権獲得チーム単体での出場では戦力的に全く不十分だと認識しています。今後ナショナルチーム編成に際して、JDBAが主導すべきなのか、代表権獲得チームが主導すべきなのか、議論を尽くす必要があると感じています。

一方で、国際大会に参加するたびに痛感させられることは、我々日本代表選手のフィジカルの弱さです。スタートで艇を動かす爆発的なパワー、ミドルで強いキャッチとストロークを続けられるスタミナ、これらを強化しなければ世界では通用しません。欧米の選手はもちろん、アジア圏の選手と比べても日本代表選手は体格的に劣っているのが現実です。乗艇練習によるパドルスキルの向上と並行して、もしくはそれ以上にフィジカルの強化を長期にわたって実施すべきだと考えます。

シニアBにおける今後の目標を具体的に設定しておきたいと思います。それは、2年後のドイツ大会で銅メダル確認、4年後の香港または6年後を目前に金/銀メダルの獲得です。そのためには4-6年後にシニアBに選出されるであろう現在のシニアA選手の強化です。スキルを磨き、フィジカルを強化して、長期的プランで臨めば実現可能な目標だと考えられます。

最後に今大会に出場するにあたり多大なご協力とサポート、ご理解を賜りましたJDBAのみなさま、各所属チームのチームメイト、選手のご家族、全ての関係者に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。そして、代表選手に手を挙げた84人の猛者達に感謝申し上げます。

【レースレビュー】

1、2000m

グループの第一漕者としてスタート。

大会初日の 1000m や最終日の 500m と共通して、どれだけ効率の良いミドルを漕げるかということにフォーカスしていました。強いキャッチとロングストロークでグライド感を出すことを意識。後半に 2 組あとにスタート(24 秒差)したタイに抜かれましたが、3 位フィリピンとの差は 5 秒以内。この距離でも世界と戦える可能性を感じる結果となりました。

タイム 10' 24" 526

- ・スタートトップ P90
- ・ミドル 始め P73→150m～ターンまで P70
- ・ターン後立ち上げ P75
- ・ミドル P70→68
- ・最後の 500m ミドル P73
- ・ラスト P75

2、200m

今大会を通じてシニア B 艇はスタートとミドル切り替えの良さがありました。体格とパワーでは上位チームに劣るものの、パドルスキルと合わせの良さで対抗出来たと考えています。

敗者復活戦を 1 位抜けしてグランドファイナルに進出。決勝レースでもスタート、切り替え直後までは互角の勝負でしたが、後半に失速。気負い過ぎて合わせにバラつきが生じた結果、予選、敗者復活戦よりタイムを落としてしまいました。

決勝タイム 0' 54" 471

- ・スタートトップ P112
- ・ミドル P90-91
- ・ラスト P92-93

3、500m

0.048 秒差の 4 位。無念の惜敗でした。

8 ヶ月前の代表選考会を実施した頃から東京龍舟競技部においてターゲットに設定していたレースです。現在の我々のスキルと体力を考慮した上で、世界と戦える可能性のある距離という認識でした。

予選においてタイ、中国に続きファステストルーザーとして一気にグランドファイナル進出を決めました。敗者復活戦を経ずにファイナルに進むこと自体、快挙と言って良い戦績だと考えています。

決勝レースにおいてもスタートが決まり、中盤までは4位NZと2-3シート差の3位をキープ。このあとNZの激しい追い上げを受けます。それでも3位を死守。残り20-30m付近からコース左に寄り始め、残り10m以下でボートのテールが少しだけ流れた瞬間にNZに差されました。このコース左に寄ったこと(蛇行)については、ゴール直後に後ろを並走していたマーシャルに危険行為として嚴重な注意を受けてしまいました。

レース直後に日本3位の表示が出たこともあり、レース結果について正式に抗議しました。しかし、結果は覆らず写真判定付きの4位でした。NZとの差は僅か20cmほど。銅メダルを目前にした、悔しい敗戦となってしまいました。

決勝タイム 2' 17" 537

・スタートトップ P112

・ミドル 始め P85

イベントで徐々下げして P80-82

・ラスト P84